

---

# 美夜星さん

ATURA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美夜星さん

### 【Zマーク】

Z5320C

### 【作者名】

ATURA

### 【あらすじ】

それは悲しい物語。夜道で少女は少年に語る。少女は軽い気持ち  
で話しかけた。あの惨劇を…。

(前書き)

コメティーばっか書いてる僕ですが。  
今回は暗く悲しい物語です。

ある夜、少女と少年が夜道を歩いていた。

「ねえ、美夜星さんって、知ってる?」

少女が唐突にきいた。

「ううん、知らない」

少年が答える。

「じゃあ、教えてあげる、それは・・・」

ある一人の少女のお話・・・

私には、変な力があつた。

妖怪をけす力。

「きえろ」と思つただけで、妖怪達は消える・・・。

その時代は妖怪がいっぱいいて、

私の力は、大切だつたらしい・・・。

私は偉いらしいう大人達に連れて行かれて妖怪を退治していた。  
悪い妖怪がいっぱいだから、私は仕方ないと思つていた。

来る日も来る日も「きえろ」「きえて」と念じて妖怪をけした。  
妖怪達からは、悲しい気持ちや、怒りが伝わってきた。  
でもけした、そうしろといわれたから・・・。

家族にも、友達にも、会えなかつた、ずっと妖怪をけしていた・・。

「もうへ、妖怪退治は終わりだ」

そつ言つたのは、私の妖怪退治を手伝つてきた、坂部さかべさん。

終わつた。

小学生の時から連れ出された私はもつ中学生だつた。

「終わつた？・・・・本当！？」

心から喜んだ、やつと家族に会える！友達と会える！  
後日、私は家に帰れた、優しい父と母、兄に姉に弟。  
みんあで抱き合つた、涙を流した。

友達とも再会した、

みんな変わつてなかつた、

また、一緒に遊んだ。

「どうこう」とだ！――

電話で父が珍しく激怒していだ。

「ゆるさんぞ！――そんなかつてな――！」  
だが相手は電話を切つてしまつたようだ。  
父は青ざめた顔をしてみんなを集めた。

「いいか、お前達、美咲みさきを守るんだ

父から言われた言葉だ。

もちろん、美咲みさきとは私のことだ。

## 「ピンポーン」

チャイムが鳴る、父は驚きつつ、怒りの顔で玄関を睨みつけた。

「私です！坂部です！美咲ちゃんをすぐ逃がしてください……。」

私を・・・逃がす？

父は急いで玄関へ行き、扉を開いた。

そして坂部さんと話す。

「車は用意してあります！家族全員で逃げましょー！」

私達は車に乗った。

そして坂部さんは車を発進させる。

「なにが起きてるのー。」

母は心配してきく。

「美咲を・・・殺すと・・・国会で決まった

意味がわからなかつた。

詳細は坂部さんが話した。

国会が美咲ちゃんの力は危険だといった。

確かに、現れると念じると・・・妖怪は現れた。

そして、その事で、私は・・・妖怪とみなされた。

「しまつた！先回りされていたか！！」

軍服の人たちがバーケードをつくり銃をこっちに向けていた。

「あぶない……」

あっけなく、の人たちは撃つてきた。

車は止まつた。

「坂部さん……」

坂部さんは頭を打たれていた。

絶叫が聞こえた、その声は私だと気づいたのはかなり時間がかかった。

「外へ出ろ！」

父がドアを開き外へ出た。  
家族全員で外へ出る。

「撃て！逃がすな！！」

容赦なく弾は襲つてくる。

「きやああーー！」

姉が撃たれた。

足をやられたようだ。

「お姉ちゃん！ー！」

「私はいいから早くーー！」

次の瞬間、姉は背中に何十発も弾丸を受けた。

「いやあああああ！－！－！」

それからは覚えていない。

父が私を抱き走つて逃げたらしい。

起きた場所は友達の家だつた。

一  
大丈夫？

因がいい悪いもいたた

卷之三

父の話でどうやら町の人達が私達を守ってくれるそうだ。

子供は山に隠れる事にした。

だが、普通の町に、銃などあるはずもなく。

講義したもの

などと言つては聞かなかつた。

「妖怪はどこだ」

「妖怪ならうちの娘が全部けした！」

「その娘が妖怪だ」

「無実の人を殺しておきよく平氣でいられるな！」

「この人殺しが！！」

「だまれ！ 国のためだ！！」

「違う！こんなのがいいわけないだろ！」

結局あいては無視をして子供探しに力を入れた。

「山にいる模様です！！」

山にいた一人の子供が見つかってしまった。

「どこの山にみんなはいるかな？」

「だれが教えるもんか！知ってるんだぞ！この人殺し！」

少年は固く口を閉ざした・・・だが、

殴られ、蹴られ、拷問を受けた。

「早くいえ！このガキ！」

耐え切れず、仲間の一人が助けるため出てきた。

「あの、山です」

涙を流し、しきりに、「ごめん、ごめん」と言っていた。

「火をつければ良いだろ」

偉そうな男が、探すのが大変だという問題に、冷酷に答えた。

「ですが、他の子供も・・・」

「かまわん、犠牲は付き物だ」

火を放たれた、

山には20人近くの子供が、

「どういうことだ！！」「

「私の子がいるのよ！！」

「お前達は何を考えていやがる……。」  
親たちは嘆き悲しんだ。

「火が近づいてきたよ……。」

「俺らまで殺すのか……。」

子供達は絶望的だった。

「ごめん……ごめん……。」

美弓は泣いていた。

「仕方ないよ」

「美弓は悪くないって」

子供達は円になつた。

「みんな、ずっと一緒に」

美弓は思つた。

許せない……さんざん妖怪退治をさせて……許せない……。

「妖怪達、全部……現れろとして……一度と決める  
な」

「そうして、子供達は全員死にました、最後に美弓ちゃんの願いは

叶い、妖怪たちは現れ、悪い人たちを殺しました、つていう怪談、  
ハハハ、こんな話、作り物に決まって」

「ねえ、なんで美夜星さんって言つか……知ってる?」

少年はうつむきながら言った。

「え? ……そういうのなんでかな?」

「……みんなのチーム名だよ、「美夜星探検隊」美しい夜の星で

「チーム名? 子供達の……結構詳しい設定だね」

少女は興味がなくなったようだ。

「…………めん…………め…………ん…………」

少年が何か言っている。

「どうしたの?」

「"じめんじめんじめんじめんじめん

少年は涙を流し田は焦点が合わず狂ったように言った。

「僕が……みんなの場所……言ひちゃったんだ

終わり



(後書き)

感想は結構です。

なにより、大切な事を感じていただければ、  
なにか大切なものを身にしみていただければ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5320c/>

---

美夜星さん

2010年11月13日14時13分発行